

支 部 通 信

公益社団法人日本山岳会山梨支部 第3期第13号
令和4年12月12日

第8回やまなし登山基礎講座を終えて

平成26年に国民の祝日「山の日」が制定され、「山の日」制定記念事業として翌年から始めた「やまなし登山基礎講座」は、昨年コロナまん延のため中止されたが、今年は2年ぶりの開講となった。前回までは、山梨学院生涯学習センターの全面的なバックアップのもとに実施してきたが、今年は会場確保・チラシ作成・募集事務・講座運営などすべての実務と経費を山梨支部が単独で行い、更に将来的にウェブ発信も考慮した形での講座となった。受講生は14名、会場は甲府市総合市民会館・大会議室で、9月8日から10月6日まで、机上講義5回、更に実践登山3回の構成で実施した。講義内容は、以下のとおりである。



第1回 9/8 (木) オリエンテーション、日本山岳会について、山の天気と観天望気

第2回 9/15 (木) 安全安心登山の基本、装備・服装・食糧

第3回 9/22 (木) 地図読み、山の自然保護

第4回 9/29 (木) 山岳遭難、山の救急医療

第5回 10/6 (木) 山の文学、山梨の登山史、山岳写真、修了式

この他に、地図読み、ロープワークとセルフレスキューを主眼とした実践登山として高川山(10/1)、茅ヶ岳(10/30、11/13)を実施。

受講生の年齢も20歳代から70歳代、登山歴も初心者から20年以上と幅があったが、講座のレベル、内容、回数等概ね好評であった。また実践登山も好天に恵まれ、登山技術の習得のみならず、受講生、スタッフの親睦も深めるものとなった。すでに来年度に向けて、今年の講座の反省点などの検証を始めており、更に充実した豊かな講座の開講を目指している。

最後に講師の方々、スタッフの皆様の尽力に感謝したい。(小嶋数文)

第63回木暮祭

第63回木暮祭を、10月16日快晴のもとに開催した。

木暮祭は、奥秩父の山々を登山の対象として世に広く紹介した木暮理太郎氏(明治6年～昭和19年、日本山岳会第三代会長)の遺徳を偲んで、毎年10月の第3日曜日に山梨県北杜市須玉町の増富ラジウム峡の奥、金山平に建つ木暮理太郎顕彰碑の前で行われ(碑前祭)、今年は第1回(昭和35年)から数えて63回目になった。

地元北杜市須玉総合支所長内藤肇氏、公益社団法人日本山岳会からは副会長坂井広志氏、常務理事柏澄子氏のほか日本山岳会山梨支部員や山梨県内の山岳関係者多数が参加された。

碑前祭は、JAC山梨支部監事小宮山稔(山梨県山岳連盟会長)の司会進行で行われた。献酒、献花の後に、主催者として小森良直(増富ラジウム峡観光協会事務局長)、北原孝浩(JAC山梨支部長)、小宮山稔(山梨県山岳連盟会長)がそれぞれ挨拶をした。

来賓紹介に引き続いて来賓挨拶として坂井広志副会長が、日本全国で行われている多彩な「山岳祭」につ

いての紹介と JAC としてのかわりについて説明された。これに関連して山梨支部長は主催者挨拶で木暮祭は支部の長い歴史において最も重要な行事の一つとして位置付けられている、そのことを入会歴浅い会員に伝え、木暮祭を将来に繋げてゆくことに努めたいと述べた。次に山梨県山岳連盟副会長磯野澄也（JAC 山梨支部副支部長）の発声で献杯をして碑前祭式典はつつがなく終了した。

引き続き木暮祭恒例のミニ講演は、内藤順造山梨支部顧問が「木暮理太郎の盟友」をテーマに行った。盟友とは言わずもがな田部重治のことである。この二人については「奥秩父の山や溪谷の素晴らしさを世に紹介した」と一般に言われているが、講演では彼らの著書には「秩父の山地に二人の足が向かうやうになったのは必然的の運命であった」（木暮理太郎）とか「内心この人と山に登ろうと考え始めた」（田部重治）との記述があり、さらに「余に登山の趣味を注入し呉れし人」（田部重治）とまで言うほど二人の深い絆を感じるとともに、二人で行く山旅がいかに充実したものであったかが理解できると紹介された。そして『山の憶ひ出』（木暮理太郎）や『山と溪谷』『日本アルプスと秩父巡禮』（田部重治）には、彼らが感じ考えるそれぞれの奥秩父が凝縮されているものと思われると述べて講演を締めくくられた。

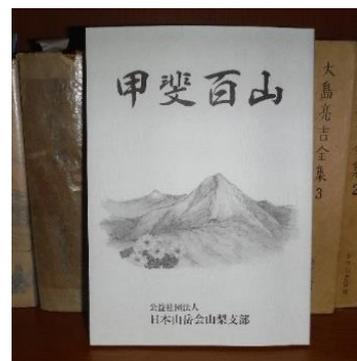


碑前祭の後の「ほうとうを食う会」が3年ぶりに復活し、熱々のほうとうに舌鼓を打ちながら談笑の輪が広がった。なお木暮祭恒例の支部山行は、午前中、近くの横尾山で実施された。（北原孝浩）

『甲斐百山』再版

支部創立70周年記念事業の一環として『甲斐百山』を発刊したのは、令和元年12月のことである。「まえがき」で深沢健三前支部長は次のように述べている。「平成九年、『山梨百名山』が山梨県によって選定された。以来、県内外から多くの登山者が百の頂を目指した。今回、日本山岳会山梨支部がプラス百を選び、『甲斐百山』を公表したのは、より多様な山梨の山の魅力を伝えたかったからである。ここにも『百の頂に百の喜びあり』に違いない」。この言葉通り、本書を手にした登山者は山梨の多様な山に登り、多くの喜びを味わったことだろう。

翌令和2年に第2・第3刷を発行したが、増刷分は程なく完売となったのち2年以上が経過した。この間、入手を希望する問い合わせが多く、今般、理事会での検討を経て第4刷を発行することとした。発行にあたり、内容の不備や現地の状況等を訂正した。第3刷以降、台風や集中豪雨が山の様相を一変させている現場が少なくない。暗たんたる思いに駆られる。今後も気候変動に伴って山が深い傷を負い、ルートの変更等を余儀なくされることが予想される。読者には、事前にインターネットや地元市町村などからの情報収集を十分に行うよう、「あとがき」で呼びかけた。安全で喜びに満ちた甲斐百山巡りが実践されることを願う。



故人となられた遠藤靖彦元支部長は、甲斐百山の選定と製作に奔走された。第4刷の発行を謹んで報告したい。なお増刷版は、県内書店やアウトドアショップ・エルクなどで販売する（税別1,600円）。支部員には割引頒価で販売予定。令和5年1月26日の新年会等で購入していただきたい。（矢崎茂男）

山行報告

ひる おおひらやま
【蛾ヶ岳・大平山】 ■令和4年7月2日（土） ■地図：2万5千図「市川大門」

■行程：大門碑林公園駐車場―四尾連湖登山口―蛾ヶ岳―大平山―蛾ヶ岳―四尾連湖登山口

■参加者：渡辺峯雄、小嶋数文、大澤純二、萩野有基子、渡辺秀子、加瀬 尚

山梨百名山の蛾ヶ岳と甲斐百名山の大平山を縦走し、帰りは四尾連湖畔で反省会をして駐車場まで戻る山行に参加した。甲府盆地の南に位置する蛾ヶ岳は、戦国時代に城から南を望むと、正午頃に太陽がこの山の頂を指すので「昼ヶ岳」と言われていたのが、いつの頃からか「蛾ヶ岳」となったらしい。晴れていれば、山頂からは富士山、八ヶ岳、奥秩父連山、南アルプスが望めるという贅沢な山である。

大門碑林公園駐車場に7時半に集合し、四尾連湖の駐車場に移動。準備体操をした後、8時に登山口を出発した。登山口からはいきなり登り坂が30分ほど続く。まだ、体が慣れていなかったのも、きつく感じた。登りきると大島山への分岐点に着く。ここから、西肩峠までは、尾根伝いに緩やかな起伏の中を歩く。西肩峠に着くと、蛾ヶ岳までは15分の標識があった、ただしここからまた急登が始まる。急坂を登り終えてしばらく進むと、山梨百名山の蛾ヶ岳の山頂に着く。しかし、期待していた富士山は雲の中、アルプスも見えなかったが、パノラマ台、竜ヶ岳、雨ヶ岳、毛無山を見ることができた。山頂には新しいベンチもあり景色を眺めながら休憩ができる。

蛾ヶ岳から大平山に向かう山道には、危険箇所が2か所ある。かなりの急降下、砂地で滑りやすく、緊張をしながら慎重に下っていく。やがて道は大平山を南に捲くようになり、大平山山頂に向かう明確な道は見当たらない。山頂に向かって枝葉をかき分けていくと、程なく甲斐百名の大平山山頂に到着した。広くはないが、富士山側が開けて明るい山頂。ここでも富士山に会うことは出来ず、お昼休憩をとった。



帰りの大島山分岐まで戻る途中、雷の音が聞こえ始め、こちらに来るのか心配したが、結局雨には遭わずに済んだ。四尾連峠を經由して四尾連湖に15時下山。四尾連湖畔でリゾート気分を味わいながら、反省会兼懇親会で疲れを癒した後、大門碑林公園駐車場に移動し散会した。

登山道は全体的に整備されていて標識も各所にあり、行程途中で登山者にはほとんど会うこともなく、のんびりと歩くことができた。初参加にも関わらず、アットホームな雰囲気の中、楽しいひと時を過ごさせていただき感謝している。(加瀬 尚・多摩支部所属)

【五竜岳】 ■令和4年7月9日(土)・10日(日) ■地図：昭文社5万図「五竜岳」

■行程： 9日 八方—八方池—頂上山荘—牛首—大黒岳—五龍山荘(泊)

10日 五龍山荘—五竜岳—白岳—遠見尾根—山麓駅

■参加者：小宮山千彰、上田謙治、相川修、窪田光一、手崎喜美子、高橋みゆき

梅雨時に間隙の晴れ間を期待し、高山植物百花繚乱の後立山八方尾根から五竜岳縦走を企画した。当日は全員の祈りが通じたのか快晴。八方のゴンドラとリフトを乗り継ぎ八方池山荘まで、そこで身支度を整え出発した。快調に八方池まで登り、右手に峻険な不帰を見る。それから上は随所に雪渓が現れ汗をかきながらも涼感たっぷりの登高となる。頂上山荘まで登り、眼前に残雪をまとった剣岳を見ながら昼食をとる。時間の都合で唐松岳山頂は割愛し、五竜岳への岩稜帯に向かう。頂上山荘前は大勢の登山客でごった返していたが五竜岳に向かうルートは殆ど人がいない。結局この日の稜線は3パーティーのみであった。右側が黒部に切れ落ちた岩稜帯を慎重に進む。K氏の足がつるが薬を飲み、ゆっくり慎重に足場を決め進んでいく。岩の割れ目に咲く花が可憐な姿で癒してくれる。順調に歩き、4時には五龍山荘に到着。冷たいビールが疲れた体に浸み込んだ。



翌朝は早い朝弁にしてもらい、朝食前の出発だ。山頂直下でご来光を拝む。素晴らしい銀色の雲海、何と神々しい朝だろう。昨日よりも手ごわい岩稜が現れ、ガスも湧いてきた。山頂での眺望は期待できないか？ 岩の感触を味わいながら登高し山頂到着。するとあっという間にガスが切れて360度のパノラマとなった。正面の剣、左には鹿島槍へ続く稜線、右手には昨日歩いた唐松までの岩稜、遠くには日本海まで見える。貸切りの山頂で感激の時を過ごし、慎重に下山した。五龍山荘で食堂を使わせてもらい、味噌汁まで

いただいて朝食をとった。心から感謝を伝えて山荘を後にした。

長い遠見尾根の下山である。天気は快晴で、暑い、暑い。雪溪の雪を帽子の中に入れて頭を冷し、皆はしやぎながらアルプス平駅に到着。その後、八方温泉で汗を流し、帰途についた。メンバーと天候に恵まれ、思い出に残る素晴らしい山行であった。(小宮山千彰)

【第3回家族登山 青木ヶ原樹海～紅葉台～三湖台ハイキング】

■令和4年8月11日(木・祝日) ■地図：2万5千図「河口湖西部」

■行程：西湖野鳥の森公園(集合)－青木ヶ原樹海－紅葉台－三湖台－西湖民宿村－コウモリ穴－西湖野鳥の森公園(解散)

■参加者：古屋寿隆、渡辺峯雄、北原孝浩、小宮山稔、遠山若枝、手崎喜美子、県山岳連盟3名、看護師1名、親子15名

今年度の第3回家族登山は、当支部と山梨県山岳連盟で共催して実施することになった。

午前8時30分、西湖野鳥の森公園に集合し、9時にNo.22標識から樹海に入る。樹海といえば不安がる人も多いが、樹海のこのコースにはしっかりした道があり、案内プレートもたくさんつけられている。また地元のネイチャーガイドが案内している場面に出くわすことも多い。そのプレートを確認しながら最初の目的地竜宮洞穴に向かう。

No.7・No.8の4差路で休憩後、すぐのNo.9の二俣を左折する。県道を渡り十字路を右折すれば、冷気漂う竜宮洞穴の氷室に至る。この溶岩洞窟の中に入り「せの海神社」本宮を見学、お参りしてから、紅葉台に向かう。いったん山の斜面を登り上げ、歌碑のある展望台から初めて富士を眺める。さらに東海自然遊歩道を東進すると売店に到着。ここまでは南側国道139号線から車で入ることもできる。子どもたちと一緒にアイスクャンディを舐め、小休止してから、15分の緩やかな登りをみんなで進むと天が開けて目的地の三湖台の広場に到着する。

三湖台には数年前、新しく板敷の広い展望台が設置された。ここから南には富士の大きな雄姿が、東には河口湖や十二ヶ岳の岩場が、北側眼下には西湖とその奥に御坂の山々、西には貞観噴火で埋め立てられた広大な青木ヶ原樹海が精進湖や遠く本栖湖まで広がっている。1300年前のここには広大な「せの海」があったのだ。親子そろって昼食後、記念撮影。紅葉台までいったん戻り、西湖民宿村へ出て、コウモリ穴まで再び樹海の中を歩いた。



子どもも大人もヘルメットを着けて、溶岩流の痕跡生々しいコウモリ穴の洞窟を探検し、本日の家族登山は終了した。子どもたちにとって、夏休みの良い思い出になればと願う。(古屋寿隆)

【横尾山】 ■山行日：令和4年10月16日(日) ■地図：2万5千図「瑞牆山」

■行程：金山平キャンプ場－信州峠－カヤトの原・展望台－横尾山－信州峠－金山平キャンプ場

■参加者：磯野澄也、小嶋数文、相川 修、北原孝浩、大澤純二、渡辺峯雄、末木佐登子、中川恵美子、岩間明子、渡辺和美、服部俊樹、大原光彦、渡辺秀子、中澤智子、広瀬英里子、小尾智子、坂井広志、柏 澄子

第63回木暮祭記念山行は、昨年までの五里山から横尾山になった。初秋の朝の冷気の中、金山平キャンプ場に、参加者が仲間の車に乗り合わせて集合する。今年は、支部員に加え、岳連の仲間、遠方より本部副会長の酒井様、常務理事の柏様もご参加くださり、総勢18名の賑やかな編成になった。さっそく磯野リーダーの進行で簡単な自己紹介を済まし、ほぼ定刻通り数台の車に分乗し瑞牆山荘前、黒森の集落を抜けて、登山口の信州峠に向かった。

峠の駐車スペースに順序よく車列を作り、向かいの登山口階段から登山道に分け入る。ミズナラ、クヌギの多い広葉樹林の下、気持ちの良い山道を登る。少し早すぎたと思われた紅葉も程よく色づき、木漏れ日を受けて木の葉が輝く様に感嘆の声がもれる。梢の間から青い空も垣間見える。これらは登山を一層楽しくする要素である。2班に分けた隊列だったが、弾む会話と笑いに夢中になるうち、知らぬ間に班分けは解除さ

れていた。足元に岩石がごろついた急登に30分ほど汗を流し、期待の展望地・カヤトの原に飛び出た。眼前に見えるはずの瑞牆山の岩峰と奥秩父の名主・金峰山は、山裾を巻く層雲で全容が見えなかったのは残念だったが、南に広がる山裾と、それに続く山並みに心が躍った。



小休止した後、すすきの茂る尾根筋を少し登り、一息で横尾山の頂上に到着した。少し窮屈な頂上から南に開けた展望を確認して、早々に帰路に就いた。午後から予定されている木暮祭の開始時間が気掛かりだったせいである。途中のカヤトの原で昼飯をとり、道標を囲んで全員が集合写真に収まった。

下山は急ぎ足であったが無事下山。金山平での木暮祭の準備のため、信州峠を後にした。(渡辺峯雄)

ごそうざん

【五宗山】 ■山行日：令和4年10月29日(土) ■地図：2万5千図「人穴」

■行程：本栖湖県営駐車場ー猪之頭トンネルー猪之頭峠ー熊森山ー五宗山ー熊森山ー猪之頭峠ー猪之頭トンネルー本栖湖県営駐車場

■参加者：磯野澄也、中川恵美子、渡辺峯雄、加瀬 尚

身延町富士川クラフトパークから見ると、左の五老峰(ごろうぼう 1619m)に対し、右側に同等の高さの山容を誇る五宗山(1634m)が奥手に見える。天子山脈の山塊は猪之頭峠を境に北部・南部に分かれ南部側の最高峰になる。奥深さゆえ存在感の割合には余り知られて無い静寂な山である。

登山口へのアプローチは、下部温泉から湯之奥経由が一般的であるが、林道工事のため富士宮市側ルートとし本栖湖県営駐車場へ7時に集合する。猪之頭より林道に入り湯之奥猪之頭トンネルに50分程で到着。8時5分、取付きはトンネル手前より右側をトラバース。痩せた尾根を慎重に登り、25分で猪之頭峠へ。ここから熊森山へは標高差200mであるが、かなりの急登だ。東に朝霧高原を前庭にした富士山、その右側に愛鷹山。時折、パラグライダーが空に舞う。北には尾根伝いに紅葉の雪見岳・金山・毛無山が連なる。西側には南アルプスが垣間見える。これらの眺めを楽しみながら、40分で標高1575mの熊森山山頂へ着く。

熊森山から南の県境尾根は、長者ヶ岳・天子ヶ岳へと続く。五宗山へは西側に連なる身延町・南部町の町境尾根を行く。色とりどりの尾根を標高差約130m下り、北側が切れ込んだコルに着く。特にハウチワカエデの真っ赤が目を引き。ここから蝙蝠山の異名を持つ、五老峰・大ガレの頭・毛無山が眼前に拡がり圧巻だ。小さなピークを登りまたコルに下り、尾根伝いに一挙に五宗山に向かう。メジャーなルートではないので、登山道は不明瞭の所も見られるが、比較的わかり易い。尾根を登りきると広い台地形の頂上部へ、さらに200m程平地を歩いて三角点の山頂へ着く。熊森山からは1時間20分の行程。昼食にして静寂な山を味わう。山頂看板も手書きの素っ気なさが良い。暫くすると3人のパーティーが遠くを通り過ぎ、何処に行くかと思いきや戻ってくる。山頂を探していたようだ。



11時40分、下山開始。往路を下る。南に向かう尾根は三石山へと至る。ヒルが心配されたが全く見られなかった。富士川左岸は送電線から五宗山間が北限か？ 下山路は1550m辺りから微妙に尾根が分かれるため、注意が必要である。約1時間で熊森山へ。猪之頭峠への下山も見極めが大事。熊森山トンネル登山口まで約1時間、13時45分に着いた。

五宗山は、甲斐百山に認定された富士の眺めの良い奥ゆかしい山である。参加者が少なかったのは少々残念だった。(磯野澄也)

【苗敷山】 ■山行日：令和4年11月3日(木・祝) ■地図：2万5千図「葦崎」

■行程：穂見神社里宮ー石鳥居ー林道分岐ー穂見神社奥宮ー苗敷山・旭山ー穂見神社里宮

■参加者：古屋寿隆、小嶋数文、能津悦治

甲府盆地の西側に位置する韮崎市付近は、山好きな人にとっては最高のロケーションの場所である。富士山と八ヶ岳を一直線上に結んだその両側に深田久弥終焉の山・茅ヶ岳と、展望の別天地・甘利山がある。甘利山の上には鳳凰三山があるが、今回の山行は、甘利山の下にある伝説の山・苗敷山(約1010m)と旭山(1037m)である。

穂見神社里宮から参道を一時間半程歩くと、「昔々、甲府盆地が湖水であった頃、甲斐の国を平地にして人民の繁栄を図ろうと、山岸を蹴抜いて甲府盆地を今の様な肥沃な土地にし、五穀万物の種をまき、苗を国中に敷いた仙人を祀った穂見神社奥宮」が、ひっそりと私たちを待っていた。苗敷山は、神社のすぐ上だが展望はない。不明瞭な道を10分程歩いた旭山からは、大好きな甘利山の紅葉を見る事が出来た。



私の今回の山行の一番の目的は、山寺仁太郎著『甘利山』にある高野槇を見ることだった。

「戦後、生け花ブームが起り、その材料に使われる高野槇の枝が高値になり、村の若者が飲み代を稼ぐ為に、木の枝の残っているてっぺんまで登ったが、何度も登られている為にツルツルになった枝に挟まり、降りられなくなり、翌朝ようやく発見され、村中の笑い者になった」

高野槇は、その後は枝を折られる事も無くなったのか、今は枝の生い茂った見上げるほどの高木になっていた。

なお、穂見神社は食べ物確保が一番の時代から、五穀豊穰を願う神社である。韮崎の周辺には、七里岩下のパワースポットの穂見神社や、20種類程のお神楽を舞い続ける奇祭の伝統を持つ南アルプス市高尾の穂見神社もある。この舞は私が子供の頃見た祇園祭を彷彿とさせるもので、一見の価値がある。これらの3か所の穂見神社を巡る山行も楽しいかもしれない。皆さんのお住まいの近くにも、昔からの伝説や言い伝えを残す山があり、新しい発見の山旅があると思う。

ずっと住んでいる町のすぐ近くにあったのに、有名な甘利山の影に隠れて山のシルエットがはっきりしなかった苗敷山。これからは車でふもとを通るたびに、「おはよう苗敷山。今日もよろしく！」と声を掛けたいものである。(能津悦治)

理事会報告

7月13日	理事会	第3回家族登山、支部山行・会員山行・個人山行のあり方
8月2日	理事会	第8回やまなし登山基礎講座、「引き継がれる山岳祭」プロジェクト
8月29日	臨時理事会	登山基礎講座準備(プログラムの変更、参加者確認等)
9月14日	理事会	『甲斐百山』の第4刷校正・増刷、木暮祭の内容・案内
10月12日	理事会	登山基礎講座アンケート結果と総括、木暮祭・横尾山記念登山
11月9日	理事会	後期(12~3月)支部山行・会員山行計画、『甲斐百山』発行

○今回も印象深い山行記録が寄せられました。植物や眺望との心躍る出会い、よい仲間との忘れ得ぬ語り、登頂の感激……。登山の楽しさの原点を思い起こしました。会員諸氏の、肩の力を抜いた積極的な投稿をお待ちしています。

○新型コロナウイルス感染症の法的扱いを「格下げ」にする議論が聞こえてきます。編者は晩秋に初めて感染し、高熱や焼けるような咽頭痛などに苦しみました。この感染症が「死に至る病」だと改めて認識しました。インフルエンザとの同時流行も懸念されます。年末年始、感染防止にご留意ください。

編集 矢崎茂男、河野芳尚(広報担当)

住所：山梨県北杜市須玉町藤田502 電話：090-7734-2788

Eメール：yazaki-s@taupe.plala.or.jp